

## 令和6年1月以降のアユ資源および漁獲の状況について

### 1. 1月以降のエリ漁の漁獲状況

- ・北湖全域で極めて低調。解禁直後には数kg～十数kg獲れたところもあるが、それ以降では1日1統あたり数尾～数百g程度の漁獲で、休漁している漁協も多い。
- ・漁獲が少なく、活魚の集荷が困難な状況(1/21～)。1月の活アユ漁獲量は203.5kgで、注引量1600kgを大きく下回った(充足率13%)。まとまった漁獲がないので、鮮魚で出荷するのも難しい。
- ・漁獲魚サイズは年末より小さいか同程度。例年の同時期と比べると大きめ。
- ・大不漁だった2017年を下回る極端な不漁。

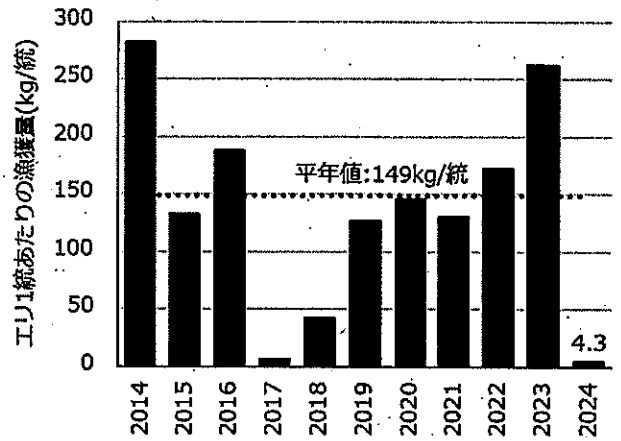


図1.エリ1統あたりの漁獲量(1月)

### 2. 今期のアユの資源状況

調査時期	8~10月	10月	11月	12月	1月		2月	
	産卵数 (億粒)	ヒウオ生息状況調査 (尾/曳網)			魚群探知機による調査		魚探調査	
調査		1次	2次	3次	周回 (群)	全域(億尾)	周回 (群)	全域(億尾)
2023年生まれ	15.2	17	13	2	36	0.6	56	1.3
平年値	75.6	159	67	19	176	2.4	152	1.7
平年比 (%)	20.1	10.7	19.4	10.5	20.5	27.0	36.8	77.5

- ・昨年産卵期の河川水温は、9月下旬まで例年の産卵ピーク時の水温(約22℃)を大きく上回る値で推移した(図2)。
- ・このため、この間に遡上したアユの多くが産卵に至らず、川の中でカワウなどに食べられやすい状態であったこと、過熟となって疲弊し死亡したことにより、水温が下がった10月中旬は親魚が少なくなった。
- ・琵琶湖の水温は平年よりやや高く推移し、餌の動物プランクトンも十分であるため、アユの成長は平年より良い。
- ・資源の平年比は2月に入りやや回復したが、依然として低い水準で推移。

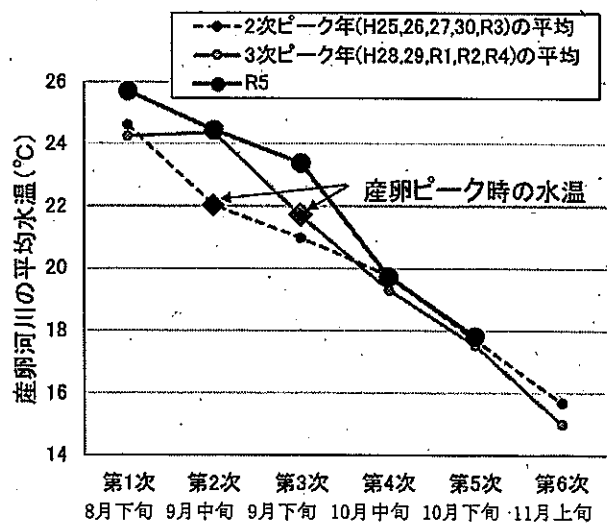


図2. 産卵調査河川の平均水温

### 3. 不漁要因について

- ① 資源が低位であることが1月以降の不漁の大きな原因であるが、資源水準から見込まれるより極度の不漁であり、それ以外の要因も考えられる。
- ② 今年の1月の漁獲アユは10月生まれが大部分で、例年は主体となる9月生まれが漁獲されていない(図3)。
- ③ 今年成長が速く、より大きく成長した9月生まれアユは、エリよりさらに岸近く、あるいは河口近くに分布する可能性が高い。
- ④ ③の可能性を検証するため、通常調査に加え、新たにソナーや刺網を使用してアユの分布を確認する。

### 4. 今後の漁獲の見込み

過去に資源が低位であった年でも、春以降には10月生まれのアユが加入することで漁獲が回復している(図4)。10月生まれのアユは少ないながらも琵琶湖に添加されており、現在、沖合には10月生まれと想定される魚群が確認されていることから、これらが成長することで、春以降の漁獲量は現在よりも回復することが見込まれる。

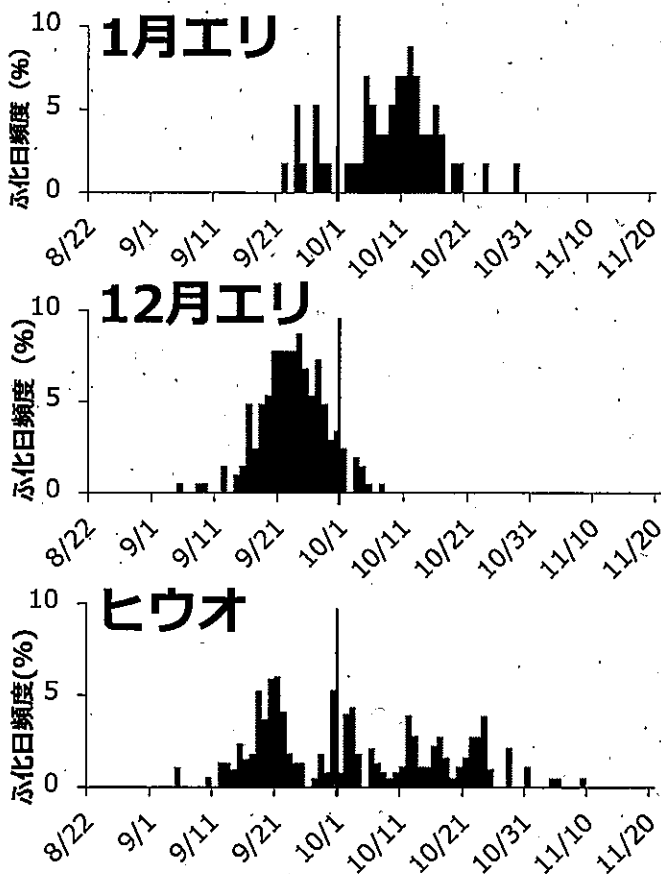


図3. 漁獲時期別のふ化日組成とヒウオ  
生息状況調査でのふ化日組成

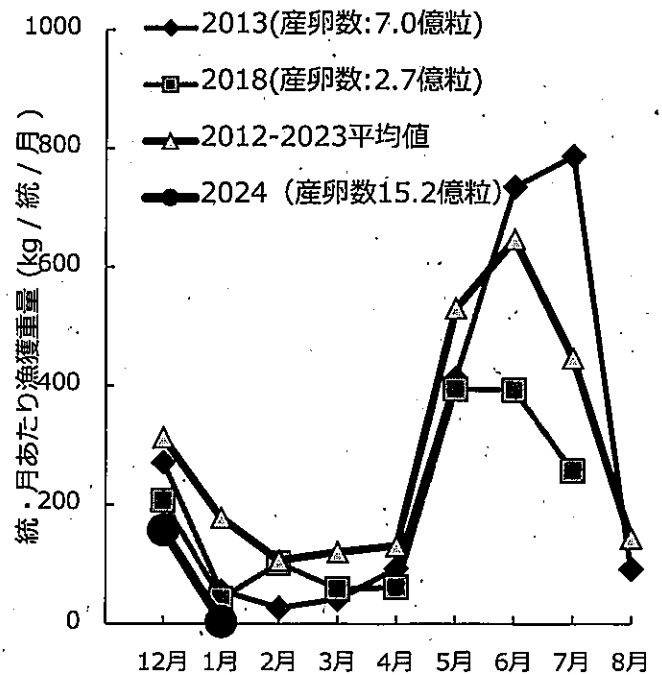


図4. 資源が低水準だった年の  
エリ1統・月あたり漁獲量